

k-627

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第17集

市内遺跡発掘調査報告書(8)

べんてんまきいせき
弁天前遺跡の調査

みなみだいひいせき
南台遺跡の調査

みしまいせき
三島遺跡の調査他

2000年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(8)

べん てん まえ い せき
弁天前 遺跡の調査

みなみ だい い せき
南台 遺跡の調査

み しま い せき
三嶋 遺跡の調査 他

平成12年3月

長井市教育委員会

序

埋蔵文化財に係わる補助事業も遺跡詳細分布調査から始まり、今年で十数年が経過し、市民の方々の遺跡に対する理解も深まってきたように感じられます。そのことを裏付けるように、本年度の開発と遺跡保護の調整件数も半数近くが民間開発事業に係わる内容がありました。

全国的視野に立って見れば、経済の成長率も右肩上がりの状況で、開発に係る埋蔵文化財の発掘調査件数は減少傾向にあります。しかし、地方においては公共事業の件数は減っていますが、民間の開発事業は必ずしもそうとは言い切れません。大規模な土砂採取事業から個人の宅地造成にいたるまで、さまざまな事業計画の中で文化財に係わる問い合わせを受けるようになります。開発と遺跡保護は切っても切り離せない関係にあることが認識されてきたと受けとめられます。

このような状況のなかで遺跡の情報提供が必要になってきます。遺跡地図や地名表といった開発には不可欠な資料提供のサービスを行い、偏りのない埋蔵文化財保護行政に取組むことが必要になってきました。また、遺跡調査は開発事業にとって重荷になると受けとめられがちです。しかし、発掘調査は新しい歴史資料を提供してくれます。地方に残る言い伝えや文献資料の枠を越えた新たな資料が発掘され、整備することで地域興しにもつながり、心の豊かさが求められる時代のなかで、遺跡が市民の財産となり保護や活用につながればこのうえ無い喜びがあります。

最後になりましたが、遺跡保護の調整にご協力いただいた関係者の方々と、悪天候のなか発掘調査に参加くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

平成12年3月

長井市教育委員会

教育長 竹田辰雄

例　　言

1. 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成11年度以降開発事業における調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。

2. 事業期間は平成11年4月1日から平成12年3月31日までである。

3. 調査体制は次のとおりである。

調査員	岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）	神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）
調査参加者	安部国藏　荒生隆三　飯沢幸一　井上貞雄 金子小作　菅野孝一郎　桑原甚一　小島正一 小島敏雄　小関実　寒河江幸作　佐藤伸太郎 須藤修一　色摩健蔵　色摩幸吉　鈴木清 鈴木弘　高橋喜平　高橋源次　高橋信一 沼沢保　松木繁雄　松木竜二　丸山忠 横沢巖　横沢利作　横山庄治　横山庄吉 横山進　横山信二郎　横山春助　横山信雄 湯ノ目道男	
事務局長	渋谷源一郎（長井市教育委員会文化課長）	
事務局長補佐	村上和雄（長井市教育委員会文化課補佐）	
事務局員	岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）	
事務局員	神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）	
事務局員	荒生幸子（長井市教育委員会文化課）	

4. 本調査にあたっては、次の方々のご指導、ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

文化庁、山形県教育庁文化財課、財山形県埋蔵文化財センター、米沢市教育委員会、致芳地区史談会、豊田地区、長井市農林課、長井市古代の丘資料館

5. 土器実測図・拓影図の縮尺は1／3で、挿図・付図の縮尺はスケールで示した。また、遺物写真のスケールは5cmを示す。

6. 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、拓本、挿図・図版の作成は荒生幸子の補助を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の方法	1
3. 調査の経過	1
II 開発事業に係る調査	4
(1) 現地踏査の概要	4
1. 戸根林B遺跡	4
2. 戸根林C遺跡	4
3. 小坂館	4
4. 南八ヶ森遺跡	4
5. 岩穴B遺跡	4
6. 愛宕山館	5
(2) 試掘調査の概要	6
7. 明神堂遺跡	7
8. 弁天前遺跡	9
9. 岩見原遺跡	13
10. 若尻砦	15
11. 安海壇遺跡	17
12. 清六清水遺跡	19
13. 南台遺跡	21
III 遺跡台帳整備に係る調査	27
14. 三嶋遺跡	27

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 現地踏査概要図	4
第3図 愛宕山館調査概要図	5
第4図 農道改良工事調査概要図	6

第5図 明神堂遺跡調査概要図	7
第6図 弁天前遺跡調査概要図	9
第7図 弁天前遺跡土器実測図、土器拓影図	11
第8図 岩見原遺跡調査概要図	13
第9図 若尻砦調査概要図	15
第10図 安海壇遺跡調査概要図	17
第11図 清六清水遺跡調査概要図	19
第12図 南台遺跡調査概要図	22
第13図 南台遺跡トレンチ概要図	23
第14図 南台遺跡トレンチ概要図	24
第15図 三嶋遺跡調査概要図	28
第16図 三嶋遺跡トレンチ概要図	29
第17図 三嶋遺跡土器拓影図	31
第18図 三嶋遺跡土器拓影図	32

図 版 目 次

図版1 明神堂遺跡	8
図版2 弁天前遺跡	10
図版3 弁天前遺跡出土遺物	12
図版4 岩見原遺跡	14
図版5 若尻砦	16
図版6 安海壇遺跡	18
図版7 清六清水遺跡	20
図版8 南台遺跡	21
図版9 南台遺跡	25
図版10 南台遺跡	26
図版11 三嶋遺跡	27
図版12 三嶋遺跡	33
図版13 三嶋遺跡出土遺物	34
図版14 三嶋遺跡出土遺物	35
付表1 調査工程表	2
付表2 埋蔵文化財ヒアリングに係る調査一覧表	2

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ現在まで216箇所の遺跡を把握しているが、近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業、土砂採取をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はほとんどが表面踏査で確認したものであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から試掘調査を実施し、一部記録として保存にあたり遺跡台帳の整備につとめた。

2. 調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施した。

(1) 現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合は現地踏査、聞き取り調査を実施し遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が開発事業実施区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲について坪掘りやチレンチ掘りを行い、遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・年代・性格を明らかにし、遺跡台帳整備の補筆にあたる。

(3) 測量調査

遺跡台帳整備の目的から遺跡の地形図測量を行い、遺跡内容の補筆にあたる。

3. 調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで行ってきた分布調査から遺跡地図を作成しており、この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画される開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを実施し、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても隨時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ体制を組織し、同様の調査を行った。その結果、本年度の調査件数は14件で、公共事業に係る調査が7件、民間開発に係る調査が6件、遺跡台帳整備に係る調査が1件である。今年度は土砂採取や宅地造成に見られる大規模な民間開発事業が相次いだのが特色である。

なお、現地調査の工程と、ヒアリングに係る調査の内訳は次のとおりである。

調査行程表

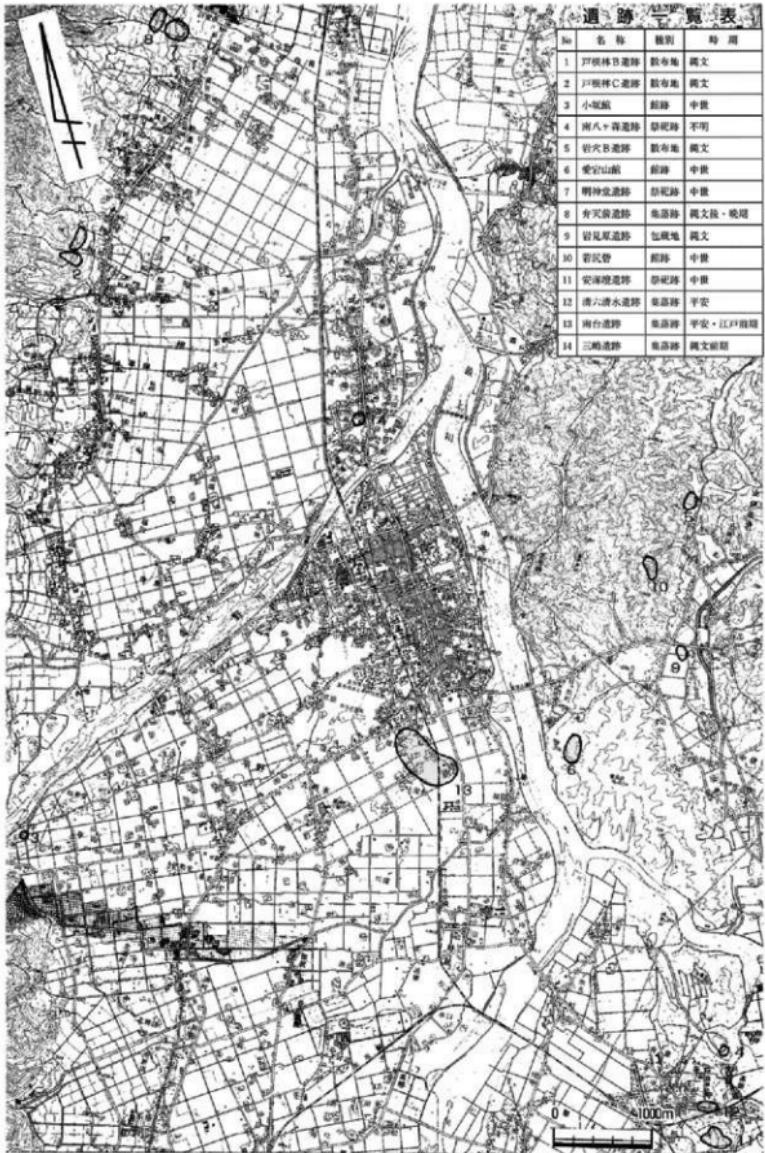
日程 内 容	平成 11 年										平成 12 年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
現地踏査								□					
試掘調査		□	□			□□		□□					
測量調査								□					
報告書作成													

埋蔵文化財ヒアリングに係る調査一覧表

事 業 種 別	遺 跡 名	調査区分	種 别	時 期	備 考
道路改良工事に係る調査	明神堂遺跡	試掘調査	祭祀跡	中世	
	弁天前遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代後・晚期	
	岩穴B遺跡	現地踏査	散布地	縄文時代	
	小坂館	現地踏査	館跡	中世	
	戸根林B	現地踏査	散布地	縄文時代	
	戸根林C	現地踏査	散布地	縄文時代	
公民館建設工事に係る調査	岩見原遺跡	試掘調査	包藏地	縄文時代	
土砂採取に係る調査	若尻砦	試掘調査	館跡	中世	民間開発
	愛宕山館	現地踏査	館跡	中世	民間開発
鉄塔建設に係る調査	安海壇遺跡	試掘調査	祭祀跡	中世	民間開発
	清六清水遺跡	試掘調査	集落跡	平安時代	民間開発
	南八ヶ森遺跡	現地踏査	祭祀跡	不明	民間開発
宅地造成に係る調査	南台遺跡	試掘調査	集落跡	平安時代 江戸時代前期	民間開発
遺跡台帳整備に係る調査	三嶋遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代前期	

遺跡位置表

No	名 称	種 别	時 代
1	戸根林B遺跡	散布地	縄文
2	戸根林C遺跡	散布地	縄文
3	小坂城	城跡	中世
4	南八ヶ森遺跡	祭祀跡	不明
5	岩穴B遺跡	散布地	縄文
6	愛宕山城	城跡	中世
7	明神堂遺跡	祭祀跡	中世
8	弁天塚遺跡	集落跡	縄文後・晩堀
9	岩見原遺跡	伝承地	縄文
10	若尻曾	城跡	中世
11	安瀬塙遺跡	祭祀跡	中世
12	猪六浦水道跡	集落跡	平安
13	南台遺跡	集落跡	平安・江戸初期
14	三崎遺跡	集落跡	縄文初期



第1図 遺跡位置図

II 開発事業に係る調査

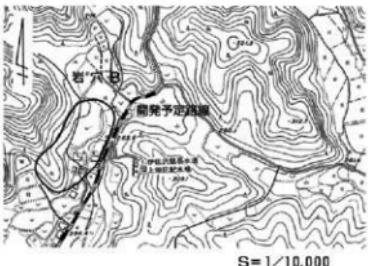
(1) 現地踏査の概要

1. 戸根林B、2. 戸根林C遺跡 市道改良工事に係る調査である。戸根林から東に張り出した丘陵上から縄文時代の遺物が収集されているため踏査を行った。戸根林B遺跡は開発事業に含まれないため遺跡におよぼす影響はない。戸根林C遺跡は道路の切り通しに沿って遺構・遺物の検出にあたったが遺跡に係わる資料は確認されなかった。工事が両遺跡におよぼす影響はない旨報告した。

3. 小坂館 市道改良工事に係る調査である。遺跡は野川右岸の段丘上に位置し、現在も幅約6m、高さ1.7mの土塁が一部残っている。明治8年の字切図から東西100m、南北80mの遺跡範囲が推定されており、館の北西部付近が開発事業の範囲に含まれたため、現地踏査を行った。その結果、開発予定範囲には遺跡は含まれず、工事が遺跡におよぼす影響はない旨報告した。

4. 南八ヶ森遺跡 鉄塔建設に係る調査である。旧石器時代の遺跡でも知られる河井山丘陵の南端部に位置する。南八ヶ森の南斜面で石製の男根が出土していること、地理的条件から旧石器時代の遺跡も予想されるため現地踏査を実施した。開発予定地域は旧鉄塔跡地や公園整備で削平を受けており、遺物・遺構は検出されなかった。開発工事が遺跡におよぼす影響はない旨報告した。

5. 岩穴B遺跡 市道改良工事に係る調査である。遺跡は通称東山の東裾野に位置し、縄文時代の遺物が採集されているが、このたび遺跡東側の道路拡幅工事が計画されたため現地踏査を行った。その結果、遺物・遺構は検出されず、開発工事が遺跡におよぼす影響はない旨報告した。



第2図 現地踏査概要図

6. 愛宕山館 民間による土砂採取事業に係る調査である。遺跡は通称東山の西側丘陵上に位置し昭和63年に発見された。館の主要遺構は標高361mの山頂部を中心に東西700m、南北400mの範囲におよび、尾根の頂部を削平し大規模な廟を形成したり、尾根を垂直に掘り込んだ堀切が隨所に構築されている。このたび開発事業に含まれた範囲は最上川に面した遺跡の西端部にあたる。遺構は弧状に築かれた帶廊が数段構築される他、尾根沿いの斜面に壇壝状の凹地が數カ所確認された。また、山道に沿って堀状の遺構が見られ、平成4年の試掘調査で同遺構から粘質土と砂質土を交互に突き固めた版築を確認している。これらのことから当該区域は最上川を意識した遺構の一部と考えられ、愛宕山館の性格を明らかにするうえで貴重な存在であり、開発にあたっては事前に緊急発掘調査を行い、記録による保存が必要である旨報告した。



第3図 愛宕山館調査概要図

(2) 試掘調査の概要

農道改良工事に係る試掘調査である。当地域は長井市の指定史跡「六道の辻」をはじめ、中世の山岳信仰に係わる遺跡が点在する。このたび農道の改良工事が計画されたため、工事の対象となる長さ1,080mの区間に20~40m間隔で1×1mのテストピット40箇所を設定し遺物・遺構の検出にあたった。その結果、調整の対象となったのは明神堂遺跡と弁天前遺跡で、報告内容は次のとおりである。



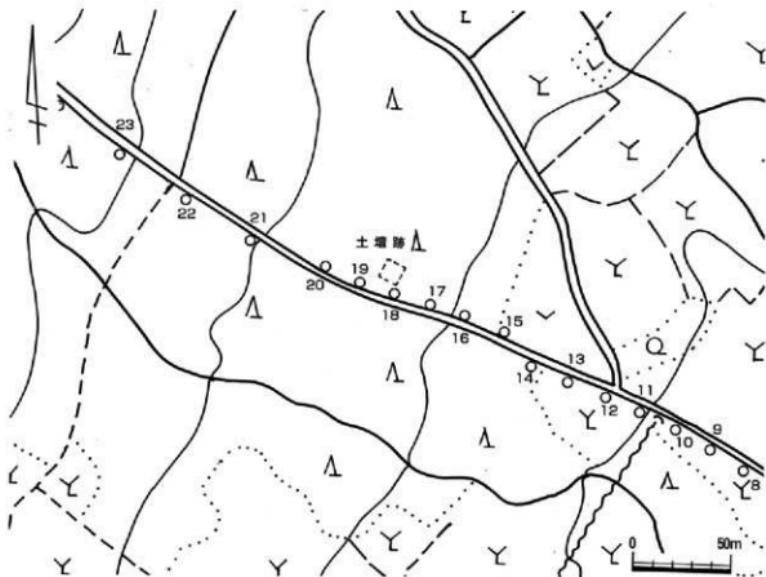
第4図 農道改良工事調査概要図

7. 明神堂遺跡

調査方法 農道改良工事に係る試掘調査で、平成11年9月20日から22日にかけて実施した。遺跡の内容を詳しく把握する目的から聞き取り調査を行った後、開発予定ルートに沿って $1 \times 1\text{m}$ のテストピットを設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 明神堂遺跡の土壇付近を深掘りしたが、TP 18・19において地山層までの堆積土が150cmをこえる深さであったが、遺構・遺物は検出されなかった。人頭大の角礫に混じり砂の層が随所で認められることから、度重なる河川の反乱による土砂が厚く堆積しているものと推測される。

調査所見 遺跡の存在する白兎地区は葉山に関する山岳修験の言い伝えが各所に残っている。本遺跡は昭和59~60年度にかけて国學院大学が発掘調査を行った土壇で、規模は高さが約2m、底辺が一辺約9m、上部で一辺が約4.5mの方形を呈する。遺跡の年代に関わる遺物の出土は見られなかつたが、結界を表現する周溝や盛土による塚の構築が確認され祭祀遺跡の報告がなされている。現在直径250mの範囲に9基の土壇が確認されており、付近には仏教の教えから名付けられた「六道の辻」も石碑を伴つて残つてゐる。試掘は土壇の南側付近にかけて丹念に実施したが遺構・遺物は検出されなかつた。地山層までの堆積も地表面から150~160cmに達する深さであったが、遺物の出土もなかつたことから、開発予定区域付近には土壇以外の遺跡はおよんでいないと思われる。したがつて、このたびの農道改良工事にあたつては、明神堂遺跡の土壇付近では慎重工事を必要とする旨報告した。



第5図 明神堂遺跡調査概要図



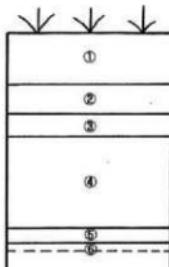
土壇近景



遺跡遠景



TP18 土層断面



TP18 土層柱状圖

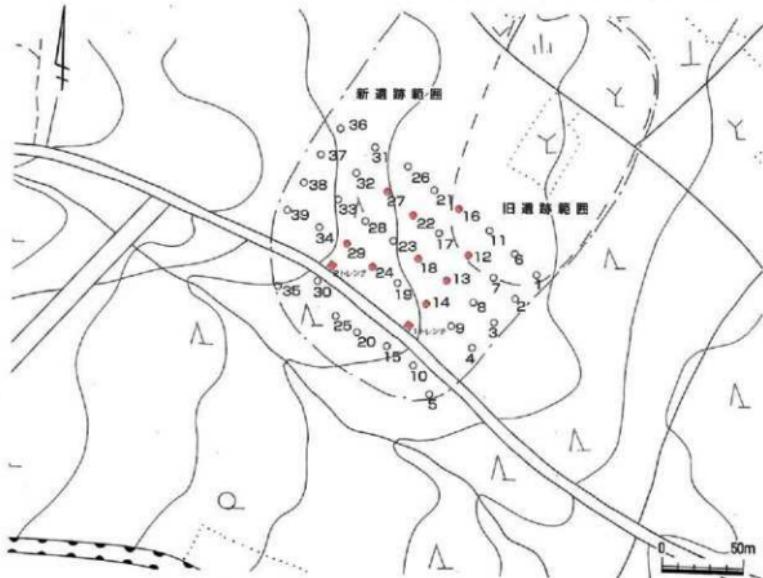
図版1 明神堂遺跡

8. 弁天前遺跡

調査方法 農道改良工事に伴う調査で10月27日から29日にかけて試掘を実施した。遺物が出土した道路沿いのテストピット (TP 29・32) を基準に 1×1 m の試掘坑を 20 m 間隔に 39 箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 基準としたテストピット (TP 29・32) を拡張し 2×2 m のトレンチとし掘り下げを行なったところ、表土下の茶褐色土 (②層) 下位から暗茶褐色土 (③層) 上位にかけて土器片が数多く出土していることから、両層を基準に掘り下げを行なったところ TP 13・24 で土器片や剥片が、TP 12・14・18・22・27・29 で遺構を検出した。

調査所見 TP 29・32において出土した土器片は、それぞれ押しつぶされた状態で出土している。また、遺物は各試掘坑において茶褐色土下位から暗茶褐色土上位に集中して検出されたことから、遺物包含層も安定して残っており、遺跡の保存状況も良好と考えられる。さらに遺跡の立地条件から、昭和57年度の分布調査で発見された弁天前遺跡の範囲が南側まで広がったものと推測される。土器の出土から遺跡の時期を特定することができ、数少ない繩文時代後・晩期の遺跡のひとつにあげられ貴重な存在である。以上のことから、このたびの農道改良工事にあたっては、既存の道路部分は掘削を受けていたため調査の対象から除外されるが、拡幅区域の土木工事は幅は狭いものの長さが 70 m に達し、遺跡におよぼす影響は大きいと考えられる。したがって工事杭 No32～39 の区間は工事と並行して行なう立会い調査を行い、記録保存の措置が必要であり工事の施工にあたっては教育委員会との充分な調整が必要である旨報告した。





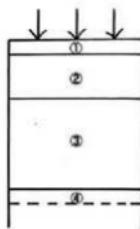
遺跡遠景



1 レンチ土層断面

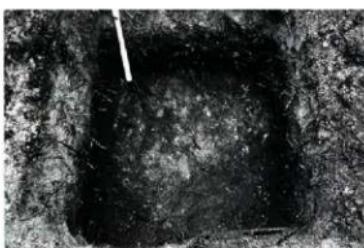


1 レンチ遺物出土状況



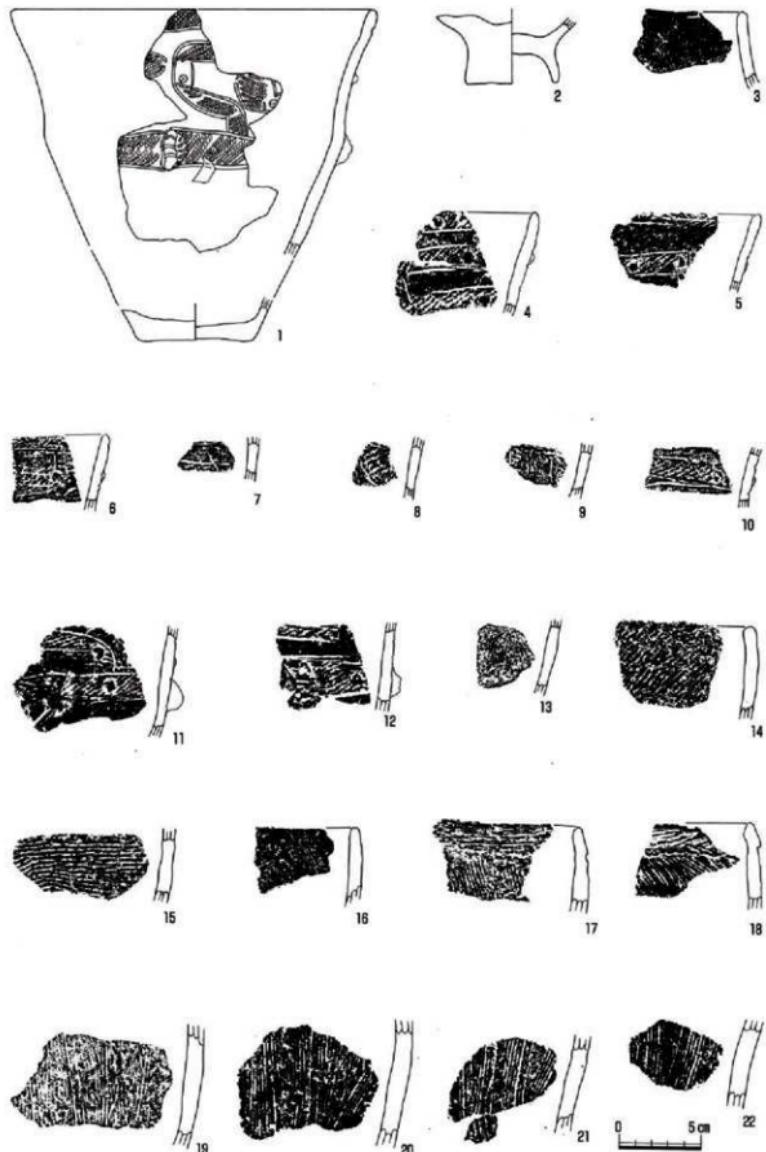
- ① 暗茶褐色土 5cm
- ② 茶褐色土 15cm
(下位: 遺物包含層)
- ③ 暗茶褐色土 30cm
(上位: 遺物包含層)
- ④ 褐色砂礫層 5cm

1 レンチ (TP29) 土層柱状図



TP29 遺構検出状況

図版2 弁天前遺跡



第7図 弁天前遺跡土器実測図・土器拓影図

遺物について

遺物はいずれも包含層から出土したもので、縄文時代の土器と石器である。

第1群土器（第7図3、図版3の3）

縄文後期中葉の土器で、口縁部が「く」形に内湾し平縁を呈する。加曾利B式に平行する土器である。

第2群土器（第7図1・4～13、図版3の1）

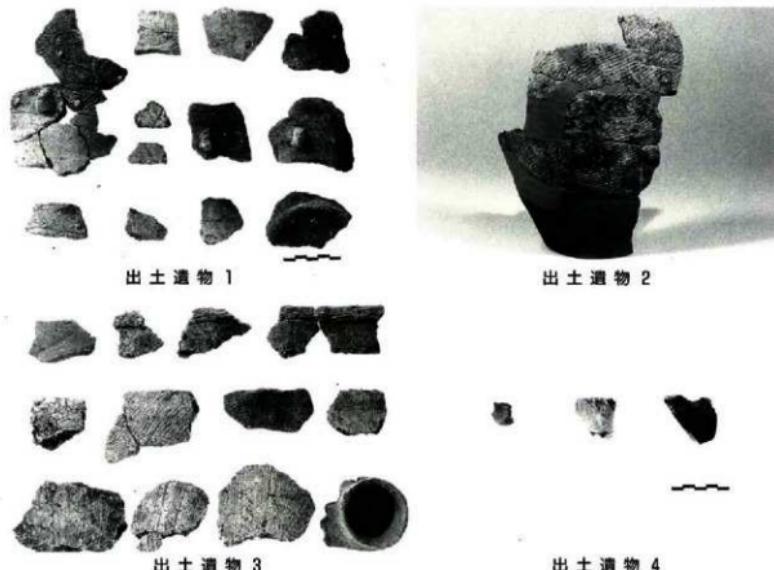
縄文後期後葉の瘤付土器で、1トレンチから一括出土したものである。口縁は平縁で胴部がくびれる器形で、口縁と平行するように沈線と斜縄文が巡る。口縁部には沈線による区画文が施されL Rの縄文が見られ、粘土を張り付けた小さな瘤がアクセントとして施文される。また、体部との境には綫長で大きめの瘤が張り付けられ、頂部には3条の刻みが横長に施される。体部下位から低部には文様が施されない土器である。

第3群土器（第7図2・16～22、図版3の3）

縄文晩期の土器を本群とする。2は台付鉢の底部破片、16～22は条痕の施された粗製土器である。17・18は折返口縁をもつ土器で、口縁が内傾し体部が張り出す器形と見られる。口端は横位に体部は斜位に、それぞれ絡条体による条痕が施される。

第4群土器（第7図14・15、図版3の2・3）

1～3群に伴う土器で、低部付近を除く器全面に節の小さな斜縄文が施される。平縁を呈し、口縁が内湾ぎみに内傾し、砲弾形の器形で2トレンチから一括出土した土器である。



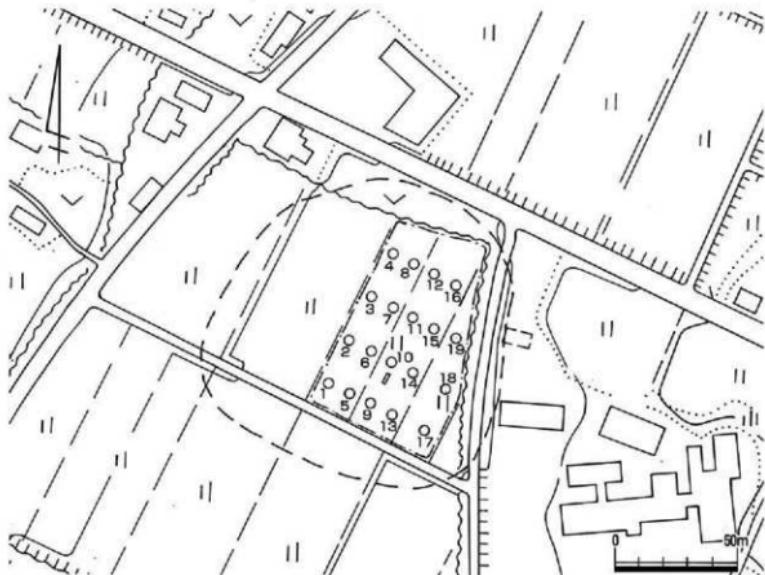
図版3 弁天前遺跡出土遺物

9. 岩見原遺跡

調査方法 公民館造成事業に係る試掘調査で、平成11年11月29日から30日にかけて調査を実施した。遺跡の内容を詳しく把握する目的から聞き取り調査を行った後、開発予定区域に $1 \times 1\text{m}$ のテストピットを10~20m間隔に19箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。また、遺跡の立地条件から $1 \times 5\text{m}$ のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 $1 \times 1\text{m}$ の試掘坑からは、遺構・遺物は検出されなかった。また、1トレンチでは磨石片が出土したが、遺構は検出されなかった。

調査所見 聞き取り調査によると、昭和50年代に行われた基盤整備事業において、現在の伊佐沢地区公民館西側の水田から土器や石器が多数出土したと言う。出土品は縄文時代中期の遺物がほとんどで土偶の脚部も含まれていた。しかし、このたびの試掘調査では遺物が数点出土したが、安定した包含層が確認されなかった。また、TP 7では深さ30cm前後で地山が現れたのに比べ、調査区域南側と北側は地山層までの堆積土が厚く、特に北側の水路沿いに設定したテストピットでは現地表面から地山までの深さが1.5mに達し、搅乱層も確認された。調査区中央部において西から東へ緩やかな傾斜をもつた微高地の存在が予想される。以上のことから本遺跡において開発予定区域に含まれる範囲は、昭和50年代に行われた基盤整備事業で破壊を受けたものと推定され、開発工事が遺跡におよぼす影響はないと思われるが、開発にあたっては慎重に工事を実施するよう報告した。



第8図 岩見原遺跡調査概要図



遺跡近景(東北より)



遺跡近景(西南より)



TP17 土層断面



トレングチ完掘状況

	↓	↓	↓
①	耕作土	15cm	
②	暗灰褐色砂質土	12cm	
③	// 粘質土	12cm	
④	灰茶褐色土	5cm	

トレングチ土層柱状図

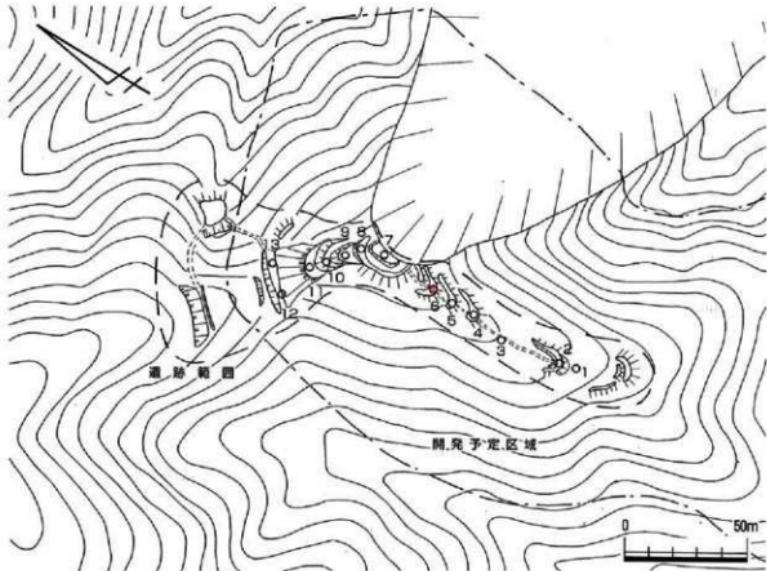
図版4 岩見原遺跡

10. 若尻砦跡

調査方法 土砂採取に係る調査で、平成11年5月25・26日に試掘調査を実施した。開発予定区域内に $1 \times 1\text{m}$ のテストピット13箇所を任意に設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。また、開発区域が広範囲におよぶことから、現地踏査を行い遺跡の確認にあたった。

調査結果 遺物の出土はなかったが、TP 6の土層断面において幅約10cm長さ30cmの茶褐色土の落込みを2箇所確認した。また、遺跡の東南部は過去に行われた土砂採取によって破壊を受けているが、将来の開発に備え当該申請区域のさらに北側一帯を踏査したが城館遺跡に係わる遺構は確認されなかったため、遺跡範囲は繩張図の範囲とした。

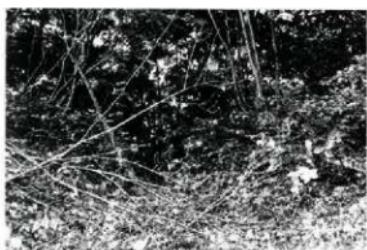
調査所見 このたびの調査においてTP 6で検出した茶褐色土の落込みは、尾根の一部を削平し、テラス状に築いた帶廓跡で確認されたものである。間隔も45cmを測り帯廓から検出されたことから杭跡と考えられる。遺物の出土はなかったものの、尾根に沿って長さ約200m、幅20~30mの範囲に帯廓や堀切が構築され、北側の尾根に築かれた堀切は4mの深さを有し、戦国期の砦跡として明確な痕跡が残っている。また、当伊佐沢地区には随所に城館跡が点在し、本遺跡も山頂に築かれた砦跡のひとつであり、長井の歴史の空白期といわれる中世期を探るうえでは貴重な遺跡である。以上のことから、本遺跡に開発行為がおよぶ場合は事前に緊急発掘調査による記録保の必要を報告したところ、開発申請区域は南西側に変更され遺跡は現状のまま保存されることとなった。



第9図 若尻砦調査概要図



遺跡遠景



柵切遺構



帶廐



TP 6 土層断面



TP 6 土層断面

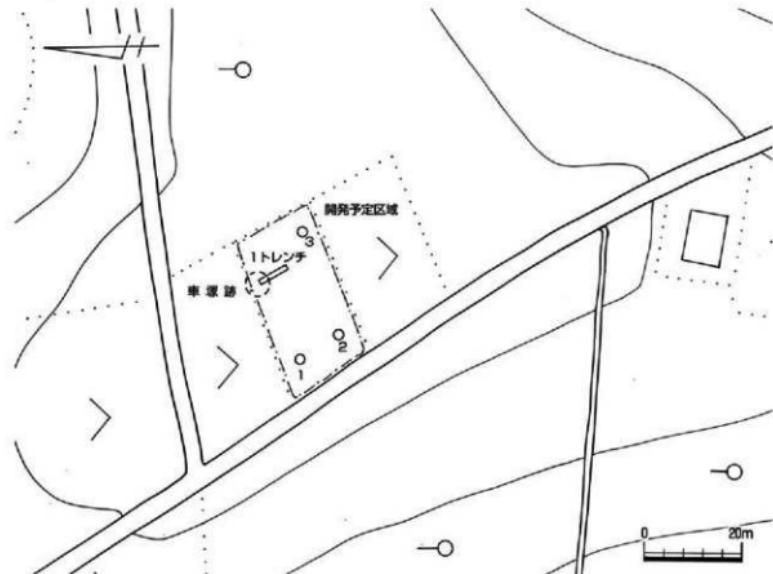
図版5 若 尻 磬

11. 安海塙遺跡

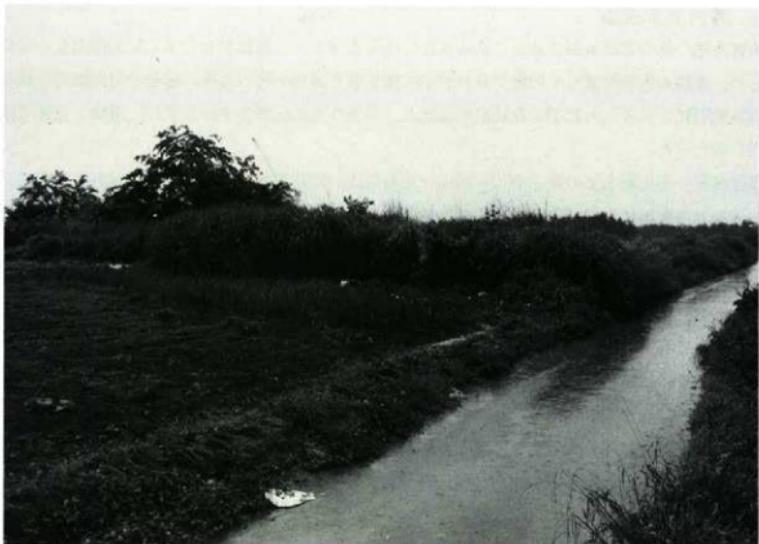
調査方法 携帯電話無線基地局の鉄塔建設に係る調査で、平成11年6月30日に試掘調査を実施した。遺跡の内容を詳しく把握する目的から聞き取り調査を行った後、遺跡範囲に係る開発予定区域内に $1 \times 1\text{ m}$ の試掘坑を3箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。また、状況により $1 \times 6\text{ m}$ の試掘溝を設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 聞き取り調査の結果、当地域には4基の塙状の小山が存在し首塙、檜塙、車塙、胴塙の名称があった。大きさはそれぞれ一辺が $3 \sim 4\text{ m}$ の方形を呈し、高さは1.5mに達した塙であったが、昭和25~26年頃の開墾で破壊を受けている。その際、首塙から寛永通宝が約30枚出土したという。また、このたびの開発申請区域の北西部において、車塙の新たな位置が明らかになり、これまでの遺跡範囲は北東に広がったことになった。しかし、試掘調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

調査所見 このたびの調査の聞き取りから、開発申請予定区域において新たに塙の位置が明らかになり、本遺跡が北東に50m広がることになった。また、首塙における古銭の出土は、地表面に近い土層から掘り出されたと言われ、供え銭とも考えられ、これらの塙は祭祀遺跡の可能性がある。当該地域は平坦な丘陵上に位置し、本遺跡の北西約500mの地点には溝で方形に区画された墳墓群も存在することから、一帯は祭祀や墓域が点在した丘だったのかもしれない。したがって開発にあたっては慎重工事が適用される旨報告した。



第10図 安海塙遺跡調査概要図



遺跡近景(北から)



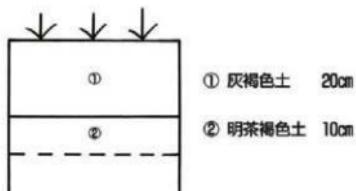
遺跡近景(西から)



TP 2 土層断面



トレンチ完掘状況



TP 3 土層柱状図

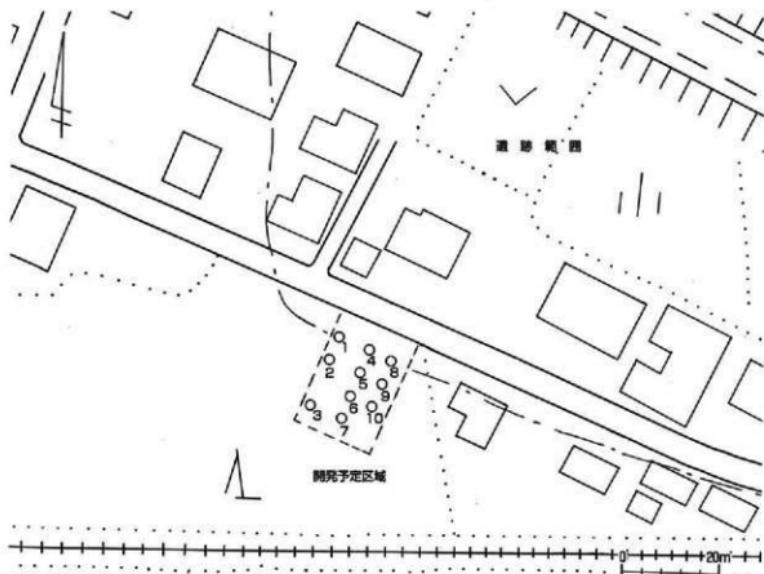
図版6 安海壙 遺跡

12. 清六清水遺跡

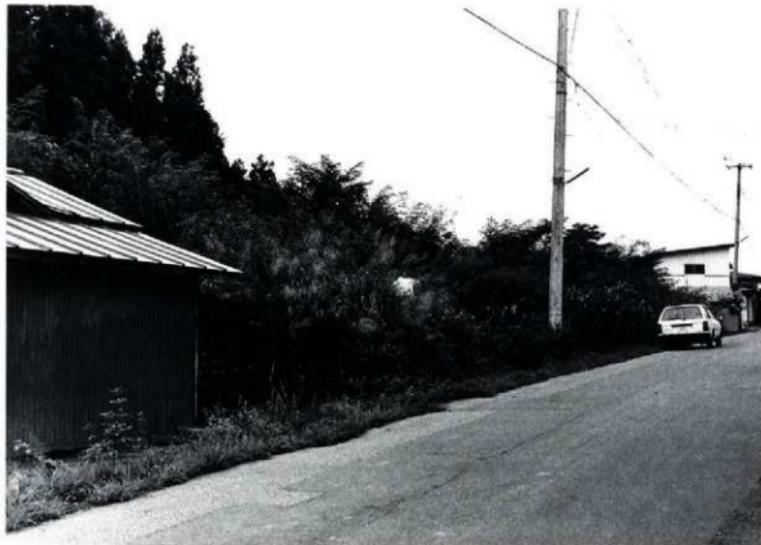
調査方法 携帯電話無線基地局の鉄塔建設に係る調査で、平成11年9月8日に試掘調査を実施した。遺跡の内容を詳しく把握する目的から聞き取り調査を行った後、開発予定区域内に係る遺跡範囲に1×1mの試掘坑を10箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 地山層までの深さが10~20cmと比較的浅い堆積である。それぞれの試掘坑から皿やお椀などの陶器片や鋸びた金属片、ガラス瓶が出土したが、いずれも表土層から検出されたものである。また、当地域は高台に位置し粘質土の堆積が安定しているため、一部深掘りを行ったが遺物・遺跡は検出されなかった。

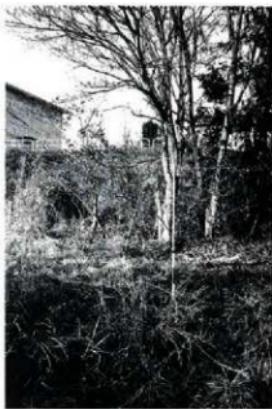
調査所見 このたびの調査で出土した遺物は表土層からのもので、陶器類の特徴から遺跡に直接結び付く資料ではなかった。しかし、当該地域は北から南に向けて舌状に張り出す大地の東縁にあたり、遺跡の南東端部に位置し、周辺には丘陵の緩斜面を利用した窓跡が見つかっている。また、開発予定区域の北東約80mの地点には須恵器片が出土していることから、周辺には奈良時代の集落跡が埋もれている可能性が予想される。したがって、開発にあたっては慎重工事が適用される旨報告した。



第11図 清六清水遺跡調査概要図



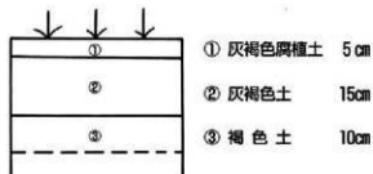
遺跡近景(東より)



遺跡近景(井戸跡)



TP 9 土層断面



TP 9 土層柱状図

図版7 清六清水遺跡

13. 南台遺跡

調査方法 宅地造成に係る調査で平成11年9月16～17日、11月15～16日にかけて試掘調査を実施した。聞き取り調査を行った後、開発区域内に1×1mの試掘坑を20ヶ所、1×5mのトレンチを12箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ遺物・遺跡の検出にあたった。

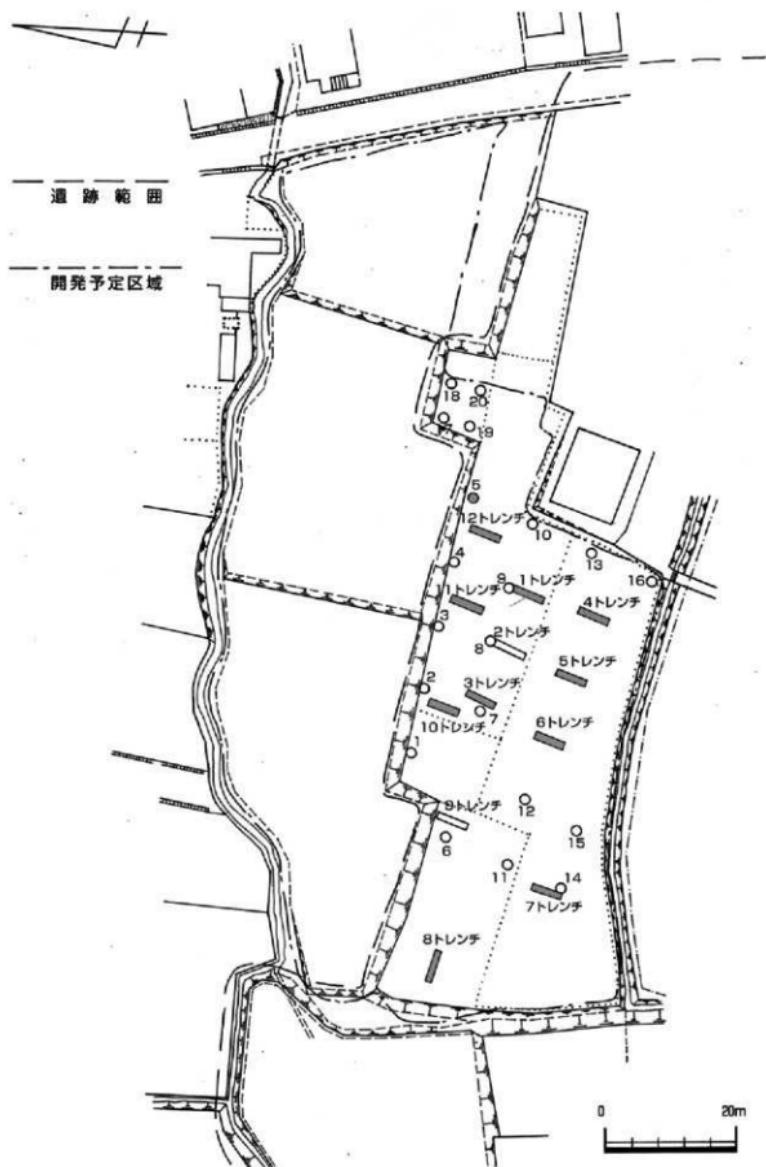
調査結果 開発区域北側の低地は大正時代に行われた土取りのため遺跡は破壊を受けている。しかし、南側の高台区域においては試掘を行ったほとんどのトレンチで、平面プランが円形や不定形の遺構を検出したほか、8トレンチでは幅3～4mの溝状遺構を検出した。それぞれの遺構は耕作土下位の灰褐色土を掘り込んで築かれており、覆土は暗茶褐色を呈する。

調査所見 このたびの調査区域では、2トレンチを除く全てのトレンチから遺構が検出されたほか、1・7・8トレンチから陶器片が、また、TP5から寛永通宝が出土した。遺物の点数は地表面から採集したものと除くと4点と少ないが、いずれも遺構の覆土からの出土である。したがって遺構の埋没とともに遺物も埋まったとの考えられ、出土陶器片の年代から17～18世紀の遺跡と推測される。また、出土した寛永通宝は銅製であること、文字の特徴などから1600年代のはじめに鋳造された貨幣であり、陶器片の年代とほぼ一致することになる。以上のことから検出された遺構は江戸時代前期の柱穴や溝跡と推定され、本市の歴史において空白の時期である上杉氏入部直後の時代と考えられ貴重な遺跡のひとつである。これらのことから、本遺跡に開発行為がおよぶ場合は、北側の低地は土取りで破壊を受けているため遺跡範囲から除外されるが、南側高台区域については緊急発掘調査による記録保存が必要となる旨報告した。

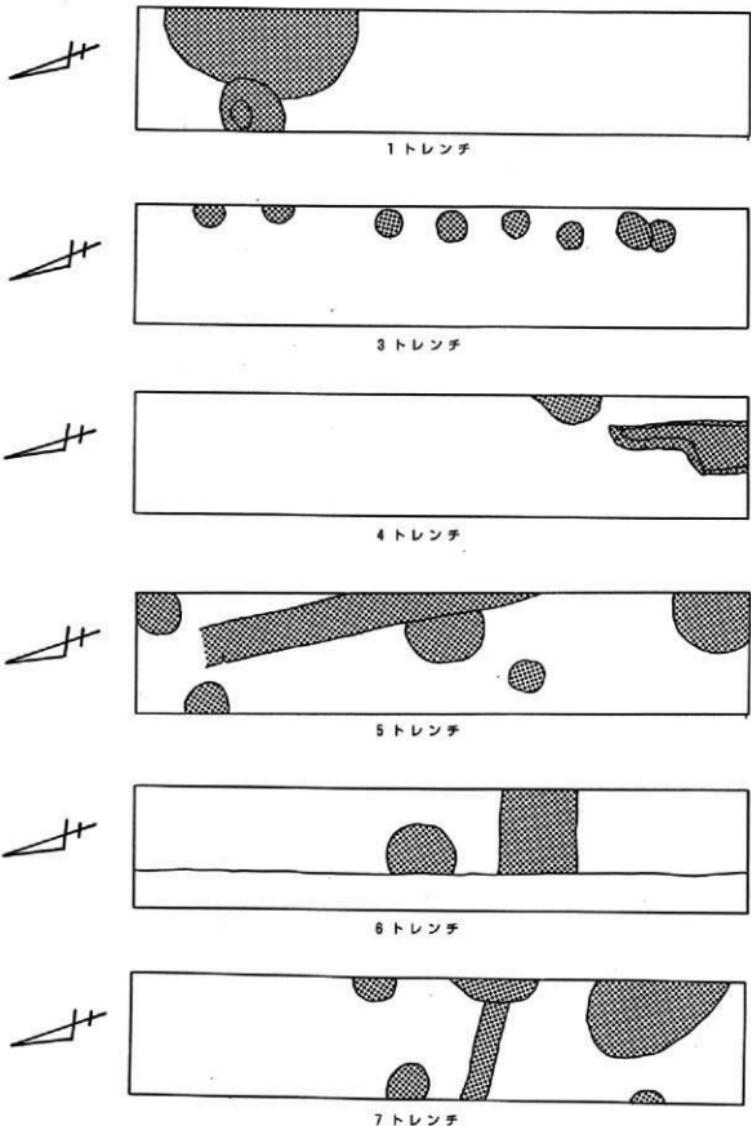


遺跡近景(北西より)

図版8 南台遺跡



第12図 南台遺跡調査概要図



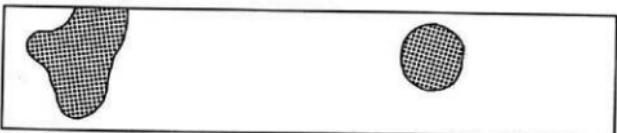
第13図 南台遺跡トレンチ概要図



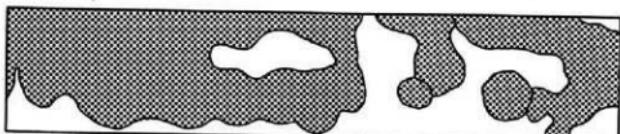
8 トレンチ



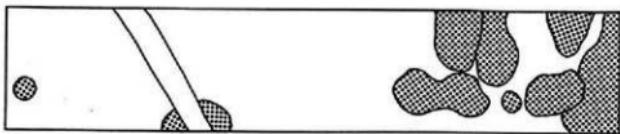
9 トレンチ



10 トレンチ



11 トレンチ



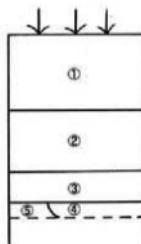
12 トレンチ



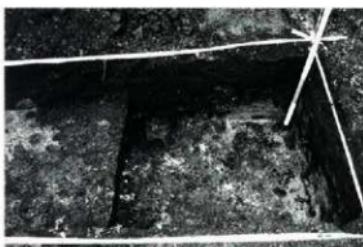
第14図 南台遺跡トレンチ概要図



TP 5 土層断面



TP 5 土層柱状図



1 トレンチ遺構検出状況



5 トレンチ遺構検出状況



3 トレンチ遺構検出状況

図版9 南台 遺跡



6 トレンチ遺構検出状況



7 トレンチ遺構検出状況



8 トレンチ遺構検出状況



9 トレンチ遺構検出状況



10 トレンチ遺構検出状況



11 トレンチ遺構検出状況



12 トレンチ遺構検出状況



出土 遺 物

図版10 南台遺跡

III 遺跡台帳整備に係る調査

14. 三嶋遺跡

調査方法 遺跡台帳整備の目的から行った調査で、平成11年12月1日から3日にかけて試掘調査を実施した。遺跡一帯は宅地・果樹畠・畑地になっているため調査可能な箇所に $1 \times 5\text{ m}$ のトレンチを4箇所、 $1 \times 5.5\text{ m}$ 、 $2 \times 6\text{ m}$ 規模のトレンチをそれぞれ1ヶ所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ遺物・遺構の検出にあたった。また、昨年度に引き続き遺跡西側の地形図測量を行った。

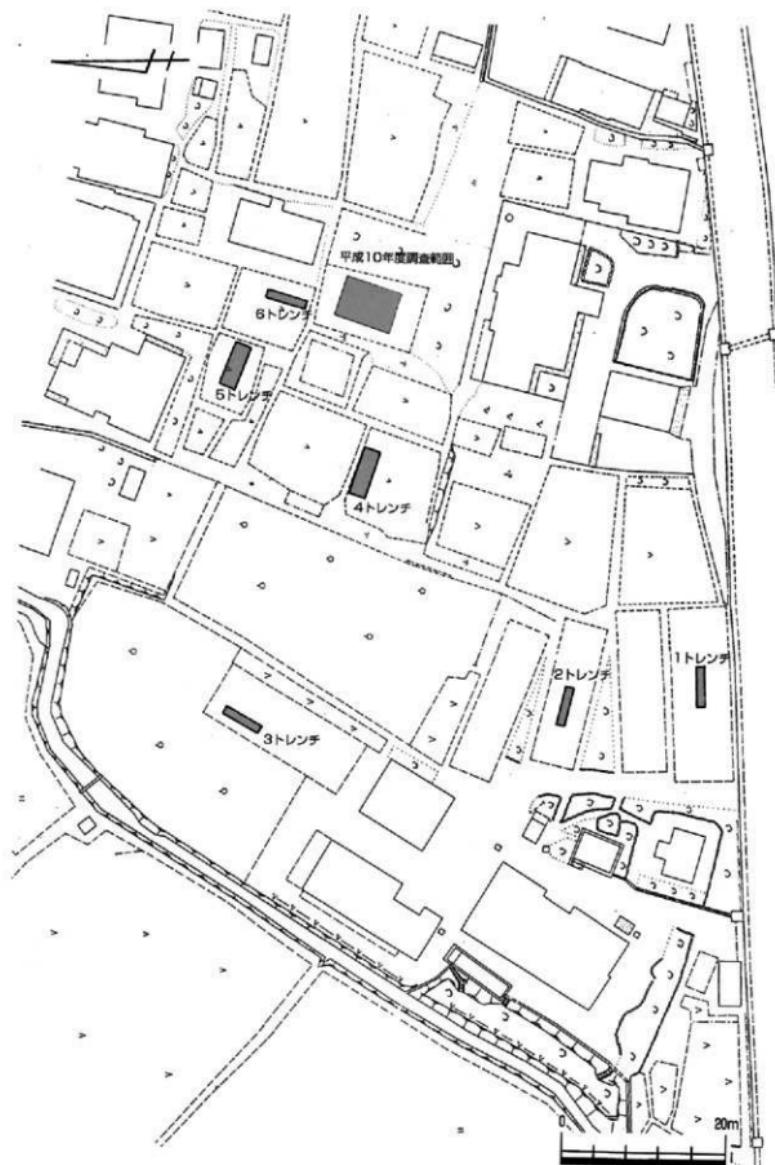
調査結果 各トレンチで遺物・遺構が検出されたが、調査区域西側では陶器片が、東側では縄文時代の遺物・遺構が主体をしめた。1・2トレンチでは幅 $2 \sim 3\text{ m}$ の溝状造構に伴って陶器片が出土した。4～6トレンチでは土坑や溝状造構に伴って、繊維を多く含む縄文土器片や石鐵・剥片・磨石等の石器類が多数出土した。遺構の掘り下げは将来の発掘調査に委ねることとし、平面プランの把握につとめることとした。

調査所見 本遺跡の試掘調査は平成9年度から実施してきたが、出土遺物の種類から中・近世と縄文時代の時期に大別される。調査区域の南と西側では陶器片の出土が多く、遺構も柱穴や幅の広い溝状造構が顕著に見られる。調査区中央から北側にかけては縄文土器や石器が数多く出土し、昨年の調査では土坑から2個体の土器が検出された。出土した土器のはほとんどは胎土に多くの繊維痕を残し羽状縄文やループ文が施され、縄文前期初頭の所産と考えられる。これらのことから本遺跡は縄文時代・古墳時代、中・近世の複合遺跡といえる。

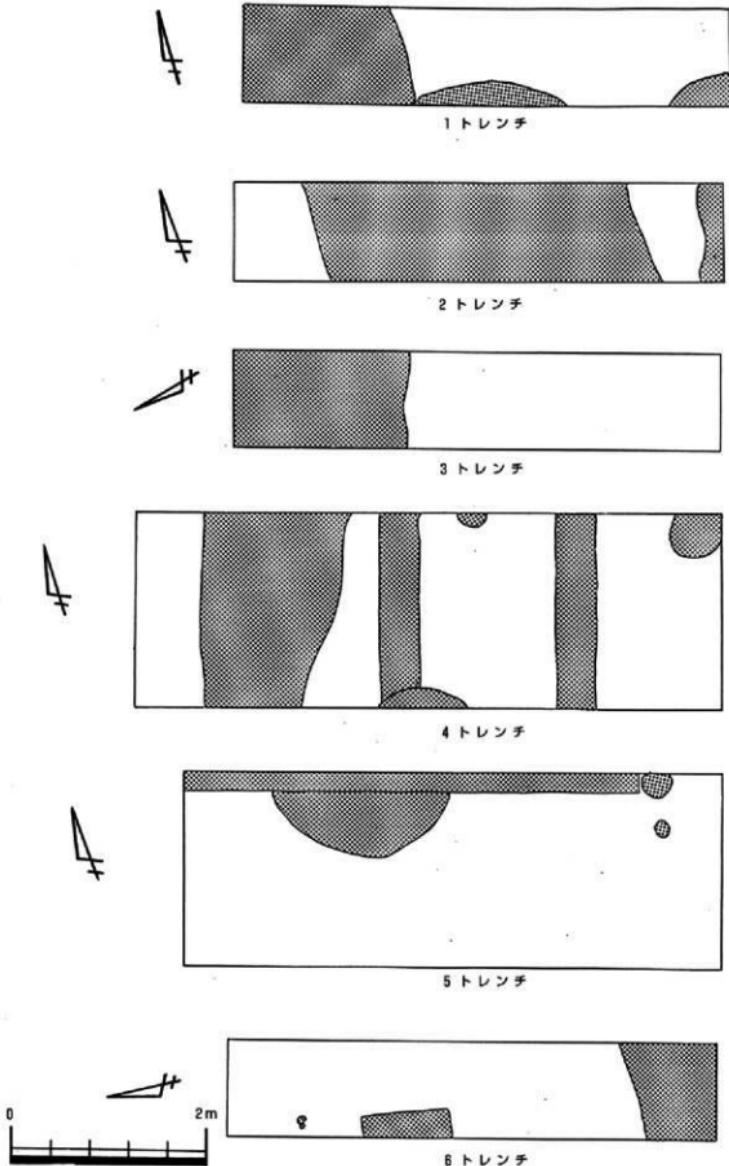


遺跡近景(東北より)

図版11 三嶋遺跡



第15図 三鳴遺跡調査概要図



第16図 三島遺跡トレンチ概要図

遺物について

(1) 土器 土器はいずれも包含層から出土したもので、胎土に纖維を含む土器である。

第1群土器 (第17図1~19、図版13)

本群は器壁に多くの纖維を含み、羽状縄文が施文され、前期初頭の土器である。羽状縄文は条の長さが10mm前後で施文幅が狭く、撓りの異なった0段多状の縄文原体を交互に施文したものである。1~4は同一個体の口縁部破片で結束のない羽状縄文が施され、7~11は底部付近の破片であるが、7の破片接合部付近には頁岩の破片が胎土に混入している。14~16は円盤状土製品。本群土器は羽状縄文に特徴がある。体部の文様は結束のない羽状縄文であるが、原体の末端において、条の閉じた部分の施文箇所が大きめの弧状を呈しているのが観察される(1・4・7・8・10)。おそらく撓りの関係で、条の閉じた端部が曲がった原体を用いて施文したためと考えられる。17~19はいずれも体部破片で、結束のある撓りの異なった羽状縄文が施される。

第2群土器 (第17図20~28、図版13)

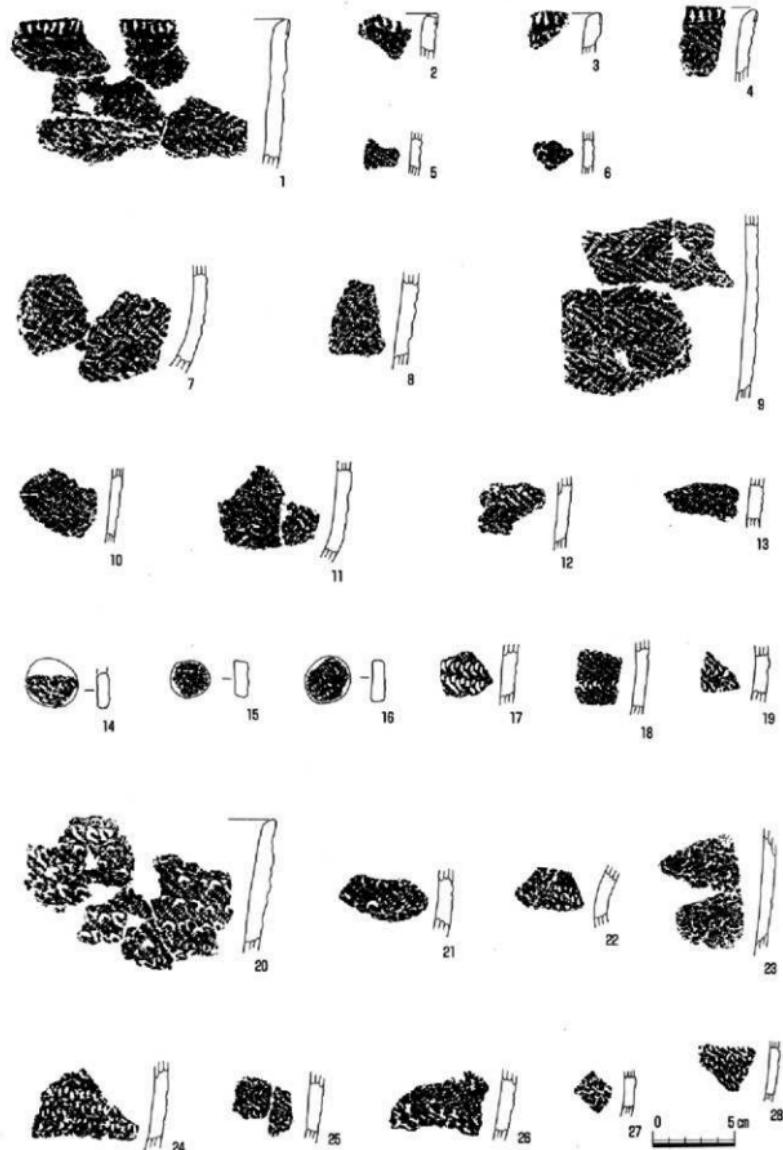
胎土に纖維を含みループ文が施され、前期前半の土器を本群とする。20は口縁部の破片、21は胴部破片、26は底部付近の破片で、器壁が厚く施文の特徴から同一個体と判断される。RLのループ文が見られるが、施文が深いため土器表面の凹凸が著しい。22は外反した口縁部の破片、23~25は体部破片で、ループ文の条の長さは長短まちまちである。27・28はRLのループ文をもつ薄手の土器で、破片下位には爪形の刺突文が施される。

第3群土器 (第18図29~63、図版13・14)

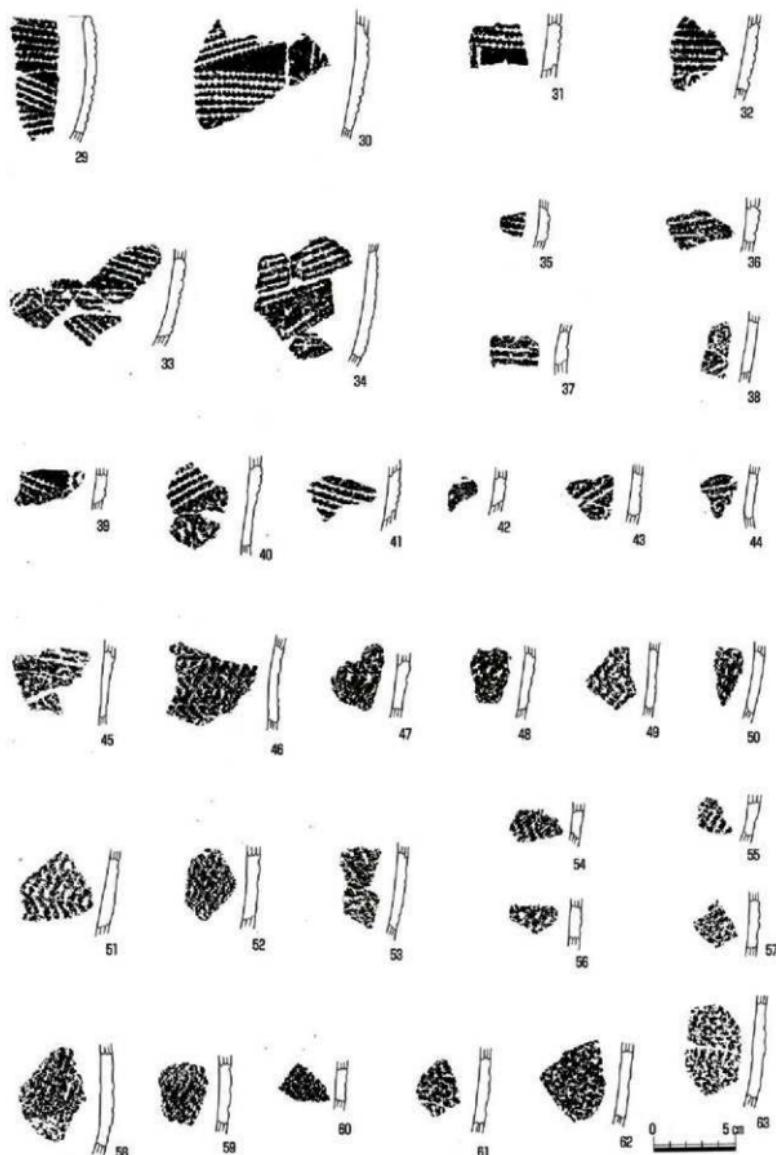
棒状工具や半截竹管による刺突が施される土器で、前期前半の土器である。18図の資料は一括出土の土器で、29~45は口縁部、46~63は口頸部から体部にかけての破片である。口縁部はやや内湾した波状を呈する器形と推測される。口縁部は半截竹管状の施文具で三角形を基本とした数条の線で区画され、四線に沿って刺突が加えられ鋸刃状の沈線を呈し、32・39には竹管の刺突が施される。口縁部には体部文様と区画するためか、半截竹管の連続刺突による波状沈線が施文される(30・46)。体部には結束のない羽状縄文が施され、7~10mmと条の間隔が狭く、撓りの異なった0段多状の縄文原体を交互に施文したものである。また、本群の羽状縄文も、末端部分の施文箇所が大きめの弧状を呈しているのが観察される(46・54・59・60)。1群土器同様に、条の閉じた端部が曲がった原体を用いて施文したためと考えられる。以上、第1群土器は前期初頭に、2・3群土器は前期前半に比定される土器である。

(2) 石器 (図版14、1~12) 石器は包含層から出土したもので、打製石器はすべて頁岩を素材としている。1~3は石鎚で、いずれも厚味のある剥片である。先端部は丸みを帯びた形状を呈し、鋭利さに欠ける。特に3は大型で背面の加工も粗く、石鎚の未製品と思われる。4は縱長剥片を素材とし、基部に剥離を加えた削器である。5~9は縱長・横長の剥片である。

(3) 須恵器・陶磁器 (図版14) 1は須恵器瓶の口縁部、2・3は擂鉢、5は徳利、4・6~13は椀や大型瓶の破片である。14は片方が凸、他方が平坦面を呈した鋳型の破片。1は8世紀の須恵器、他は中世から江戸時代中期にかけての陶磁器類である。



第17圖 三峯遺跡土器拓影圖



第18図 三鳴遺跡土器拓影図



4 トレンチ遺構検出状況



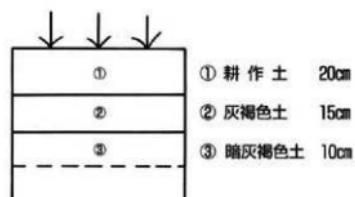
1 トレンチ遺構検出状況



3 トレンチ遺構検出状況



5 トレンチ一括出土状況



3 トレンチ土層柱状図

図版12 三嶋遺跡



第1群土器



第2群土器



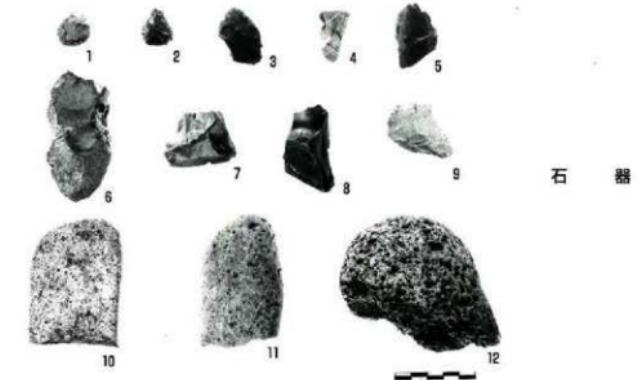
第3群土器



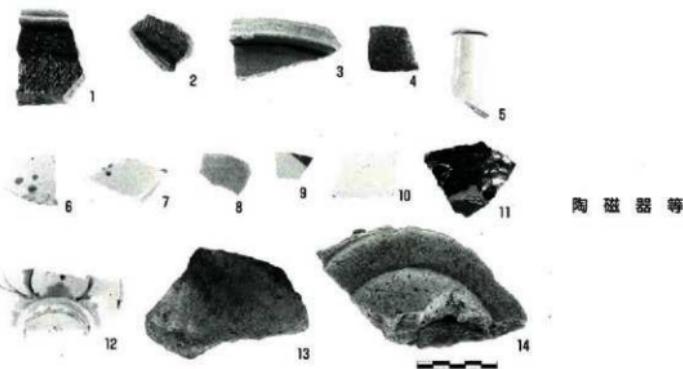
圖版13 三嶋遺跡出土遺物



第3群土器



石 器



陶 磁 器 等

圖版14 三嶋遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	弁天前遺跡の調査、南台遺跡の調査、三鷗遺跡の調査 他							
卷次	8							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-0001 山形県長井市ままの上5番1号 TEL.0238-84-2111							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因	
弁天前	山形県長井市白兔字弁天前	6209	57	38度09分40秒	140度01分48秒	1999.9.20~22 10.27~29	46m ²	農地改良工事に伴う試掘調査
南台	山形県長井市台町字南台	6209	11	38度05分27秒	140度02分10秒	1999.9.16~17 11.15~16	80m ²	宅地造成に伴う試掘調査
三鷗	山形県長井市成田字三鷗	6209	42	38度07分15秒	140度02分25秒	1999.12.1 ~ 1999.12.3	42m ²	遺跡台帳整備に伴う試掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
弁天前	集落跡	縄文時代後期、晩期		縄文土器、剥片				
南台	集落跡	江戸時代前期	柱穴列、礎石、溝跡	陶器、古銭				
三鷗	集落跡	縄文前期初頭、中・近世	土坑	縄文土器、石鎚、剥片、陶器				

**長井市埋蔵文化調査報告書 第17集
市内遺跡発掘調査報告書(8)**

平成12年3月25日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市まつの上5番1号
TEL (0238) 84-2111

印刷 ダイヤ印刷所
山形県長井市高野町1-6-20
TEL (0238) 84-2317
